

干ばつ時のかん水と摘採が茶樹の樹勢維持に及ぼす影響

矢野清・常包一明・安部秀雄

夏季に人為的に降雨を遮断した干ばつ条件下でかん水と摘採が茶樹の樹勢維持に及ぼす影響を検討した。すなわち、かん水は設定かん水量を試験開始時重量(4,800g)と 1~2 日毎に測定したかん水前重量の差の 100%,50%あるいは 25%とし、摘採は放任,7 月 25 日あるいは 8 月 10 日新芽摘除とし、これらが茶樹の樹勢の指標ともなる蒸散量および生育量に及ぼす効果をみた結果は次のとおりである。

1. 設定かん水量と実かん水量の関係は放任区ではなか高の 2 次曲線的な反応を示し、一方、新芽摘除区では設定かん水量の増加に伴って実かん水量は直線的に増加した。設定かん水量が 25%あるいは 100%かん水では両区の差は認められなかったが、30~80%かん水では新芽摘除区は放任区より低い値を示した。
2. 設定かん水量と蒸散量および生育停止時の生育量の関係は実かん水量のそれと同様な傾向を示した。
3. 秋芽の芽数は 7 月 25 日新芽摘除区が他区よりまさり、しかも設定かん水量の増加に伴って芽数は多くなった。さらに、秋芽の芽数の増加は生育停止時の地上部の生育量の増加につながった。
4. 実かん水量と蒸散量および生育停止時の生育量間には有意な相関関係が認められ、実かん水量は蒸散量および生育量に影響を及ぼした。
5. 以上のことより、かん水可能な場合はかん水と早い時期の三番茶摘採が、かん水不可能な場合は早い時期の摘採が干ばつ時の茶樹の樹勢維持に有効であろうと考えられる。